

これまでの実践提案を活用し、学力向上に向けて校内研修の充実を図る提案

主体的・対話的で深い学びのできる校内研修
知識構成型ジグソー法を使って、「埼玉県学力・学習状況調査」の結果を分析する。

◆ 所属・提案者（◎代表者）

川口市立安行東小学校

◎大高 珠恵

ねらい

- ① これまで本校は国語の校内研修をしてきたが、「埼玉県学力・学習状況調査」では、どの学年とも埼玉県や川口市の平均を下回る項目があり、また昨年度と比較して学力の伸びがもう一步の状態であるため、児童の学力向上が望まれる。
- ② 本校「学力向上プラン」を全職員で取り組むにあたり、共通認識と職員一人ひとりの意識向上が必要である。
- ③ 本校の教員は熱心に教材研究をしたり丁寧な指導を行ったりすることができるが、学習内容・指導方法の工夫改善などの視点をチームとして共有することが少ないため、効果的な授業改善の推進が期待される。

上記のとおり本校の課題を明確にすることで、次のとおり全教職員の共通理解を図り、児童の学力向上に向けた取組を推進することがねらいである。

- ① 「埼玉県学力・学習状況調査」の結果を基に本校児童の課題を分析し、仮説や方策を立てると共に、「学力向上プラン」を再考し推進する。
- ② 児童の弱みを補う取組を実践し、強みを引き出し生かす指導を推進することで児童の実態に即したP D C Aサイクルを構築し、効果的な教育実践を行う。

実践内容

校内研修で行った活動の流れは、内容は次のSTEP 0～6の通りである。

事前準備

「平成29年度埼玉県学力・学習状況調査」調査結果のCDから、帳票「26 学力の伸びの状況」「27 異なる年度の過去の同学年との比較」「09 教科に関する調査」「12 教科に関する調査」「28 各実施主体の調査結果表」をプリントアウトする。これらを人数分に分け、全職員に配布する。【資料1】



STEP 0 ガイダンス (5分) 【資料2】

レジメ・ワークシートをもとに、本研修のねらいと手順についての説明を行う。
ねらい：本校児童の実態と課題を明らかにし、方策を考える。

STEP 1 自分で分析 (5分)

職員一人一人が、帳票から自分が読み取ったことをワークシートに書く。

STEP 2 エキスパート活動 (15分)

同じ帳票番号同士が集まり、分析するグループをつくる。自分が読み取ったことを発表し合い、さらにグループで児童の実態について読み取る。自分以外の人を読み取った内容を知ることができるので、児童について多面的な理解を深めることができる。

STEP 3 ジグソー活動① (10分)

同じ学年同士が集まり、読み合うグループをつくる。STEP 2 で読み取った事柄を持ち寄り、グループで児童の実態についてさらに読み取る。違う番号の帳票を持つ人の分析を聞くことができ、STEP 2 とは異なった視点から児童の実態を理解し、課題をつかむ。

STEP 4 ジグソー活動② (10分)

課題をつかむことができたなら、STEP 1 ～ 3 での分析を根拠に仮説と方策を考える。

STEP 5 クロストーク (10分)

STEP 3 ・ 4 でのグループで、仮説と方策の発表をする。他のグループの発表を聞き、学校全体の課題や方策について共有する。多様な授業改善や指導法についても知ることができる。

STEP 6 一人でまとめる (5分)

本研修を通して分かった本校児童の課題と方策を記入する。また、2学期以降改善・実践できることについても記入する。【資料3】

事後

① 職員からワークシートを回収し、学年ごとに実態・課題、仮説、方策をまとめ、配布する。

【資料4】

② 本研修で考えた方策をどこでどのように年間計画に取り入れるのかを学年で話し合い、実践する。

③ 学年での計画・実践を基に「学力向上プラン」を見直す。

実践時期・期間

- 夏季休業中の1時間(校内研修)
- 年間を通した取組(実践)

実践の成果や課題

【成果】

- 一人一人違う帳票を渡されるため、全職員が必ず自分の読み取った内容を発表することになる。主体的にねらいと関わるができる。
- 協働で分析することでチーム安東小としての意識向上が図られ、課題や方策について共通理解をもつことができる。
- 自校の課題や強みが明確となり、4・5・6年の担任以外でも、具体的な目標をもち学力向上をめざして実践しようとする意欲がわく。
- 多くの帳票を分析することで、児童の実態を多面的にとらえることができ、生活のようすや学習の仕方などからも学力向上のための方策を探ることができる。
- 本研修を「主体的・対話的で深い学び」の学習モデルとして、授業で実践するきっかけとなる。



【課題】

- 本研修での方策が年間を通してどのように実践され、どのような成果があったのかを報告する機会をもち、効果的なPDCAサイクルを構築したい。
- 来年度も「埼玉県学力・学習状況調査」の結果分析を行い、今年度の取組について検証したい。

失敗しないための方策

- ①事前に帳票・レジメ・ワークシートを準備する。
- ②STEP ごとの時間を区切り、スムーズに活動できるようにする。
- ③グループごとに話し合いのできる場所を用意する。

こうすればより高い効果が得られる方策など

クロストークの内容や分析結果を整理し、記録として後日職員に配布する。それらをもとに、何を、いつ、どの教科で、どのように取り入れるのかを学年で話し合い、深化・具体化・計画化する。

他校で導入するポイント

- ①校長・教頭もグループに入ってもらうことで、職員と意見交換できる場となる。
- ②本校は研修の参加人数が45名と多く、たくさんの帳票を分析することができたが、学校の実態によっては、グループの作り方を工夫する必要がある。

セールスポイント

- ①何人かの教員に資料分析を任せるといふ負担がなくなり、全職員が主体的に取り組み、深い学びのできる研修となる。
- ②児童の実態について数値で表されているので、4・5・6年生に関わっていない教員でも客観的に分析することができる。
- ③膨大な資料を有効に活用し、児童に還元することができる。分析も1時間で終わる。

外部有識者からのコメント

- 全教員によるデータの分析や共通理解は、課題解決に向けた取組を多様にするにはよい。
- 知識構成型ジグソー法を協議のツールとして使用し、同校の学力向上への取組を協議することにより二つのメリットがある。ひとつは参画する教員の取組に対する意欲づけが行われ、さらには教員自身の授業ツールとしての活用のスキルを高めることにつながることである。
- こうした方法で明らかになった実態と課題が、これまで認識していた児童像とどのように異なり、同じであったかなど、そのギャップを認識することで、従来の学習指導を改善する方策をたてることが重要である。
- 資料4の吹き出しで計画と成果の報告を求めているが、評価の視点を明確にし、個別にあきらかになったことを体系化していくことで方策が単なる思い付きの羅列で終わらずにすむであろう。